

令和二年九月吉日初版作成

神意識を深める

高嶋 善三郎

目次

- 神意識にはいろいろな段階がある・・・・・・・・・・3
- 神の生命（愛の心）を形ある世界に現わす・・・・3
- 分別心と本心を統合する・・・・・・・・・・4
- 自分を赦すことの大切さ・・・・・・・・・・5
- 人間性本来の智慧と直観とが全く一つになる・・・・6
- チャクラを常にかけて置く・・・・・・・・・・6
- 暗黒的想念の波動を見極める直観力・・・・・・・・8
- 神界に座を置く・・・・・・・・・・8

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

（ケータイ） 09033466619

（アドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

神意識にはいろいろな段階がある

神意識を深めるといふことは、どういうことなのか。具体的にどのようなことをさすのか。神意識を深めるにはどのようにすればよいのか。等ご質問をいただきましたので、整理していきたいと思えます。『宇宙神の光により、神意識を深める』においても言及しましたが、さらに分かりやすく理解できるように整理していきます。

神意識には、色々な段階があります。『神と人間』(12ページ)にある「救われに入る人間観」を参考にみてみましょう。

- ①人間は肉体のみならず、肉体のうちに、生命となって活動している何かがある、と認識して、そうした方向に生きていく神意識。
- ②人間は霊が主であり、肉体が従であるという神意識。
- ③人間は神によって創られた者であって、あくまで神の下僕であるという神意識。
- ④人間は神によって創られた被造者であるが、神は愛であるから、愛の行いを積極的にしていれば、決して自己に不幸は来ないと確信している神意識。
- ⑤神のことも、霊のことも、特別に考えぬが、ただ、ひたすら、素直な明るい気持ちで、愛行をしている神意識。
- ⑥人間は霊であり、肉体はその一つの現われであって、人間そのものではない。人間とは

神の生命の法則を自由に操って、この現象の世界に、形の上の創造を遂げてゆくものであると識り、神我一体観、自他一体感を行動として表現してゆくという神意識等があります。これらの内⑥は、仏陀やキリストの聖者の神意識であると、五井先生は解説されています。

今回整理するのは、この⑥の神意識であります。

私たちの神意識は、どの段階にあるのでしょうか。これまで神意識について、特に考えたことはなかったが、五井先生が教えてくださいました神意識は、聖者の神意識だったのだとはじめて気づき、感嘆されている方もおられるでしょう。

一方明解にこの聖者の神意識を学び、自分のものにしようとしている段階の方もおられることでしょう。またもう既にその神意識を獲得した方もおられるでしょう。

ここでは、五井先生が私たちに解説して下さいました、神意識のポイントについてあらためて整理していきます。

神の生命(愛の心)を形ある世界に現わす

神のみ心とは、まず、平和な心ということ、すべてを自ら自身と観する心、こちら(人間)側からいえば、自他一体の心ということになる。別の言葉で言えば、愛ということになる。』続

また、人間とは肉体だけではない。神、すなわち宇宙に遍満せる生命が、その創造せんとする力が、個々の人格に分けられたもので、しかも横において繋ぎ合い、協力し合って、その与えられた力を、縦横に、自由無碍に發揮し、形ある世界に完全なる神の姿を画き出そうとしている者である。神とは宇宙に遍満する生命の原理であり、創造原理であり、人間とは神の生命を形ある世界に活動せしめんとする神の子なのであると五井先生は解説されています。(『神と人間』16ページ)

これから考えられることは、神意識を深めるとは、神の生命(愛の心)を形ある世界に、すなわち私たちにとってはこの肉体世界に画き出すために活動し、極めることであるといえます。

具体的に言えば、業想念感情に満ちているこの肉体界では、神意識を深めるとは、創造主である神の分身(光)としての自分を潜在意識や顕在意識の中に受け入れ、それによって満たし、自己中心の感情、即ち業想念感情を常に浄め、また、他の人の感情に執着せず把われずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得るようになることあります。別の言葉でいえば、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立つ状態

となると言えます。

分別心と本心を統合する

ここで自己中心の感情、即ち業想念感情について確認しておきましょう。これは、過去世から現在に至るまでの、すべての苦悩の姿を起す誤てる想念ほか、善き運命の姿を現す業想念をも意味します。

五井先生は、業想念について、過去の自分と今の自分を区別して説明されています。

過去の自分について、自分の運命、善きものであるが悪いものであるが、即ちすべて過去世からの想念行為(過去世から現在までに自分が発した想念行為)が現れては消えてゆく姿と説明されています。

そして一方今の自分については、その運命の流れの中に生かされていますが、同時にすべてを創造できる神の中にあるといわれているのです。

従来の流れに沿って、想念行為をすれば、従来運命を続けることとなります。一方今の自分は神の中にあると意識し、現れてくるものはすべて消えてゆく姿として感謝して生活することに徹すると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できると言われています。

(『如是我聞』73)

ここでいわれている神とはなにかというと、生き続ける生命である、即ち無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心であり、内なる神（本心）です。人間がいかなる不安恐怖の感情に襲われても、動揺もなく、ただ喜びと感謝に包まれ、必要に感じ、無限なる叡智など無限あるすべてを現わし、満たす存在です。

過去の自分はどこにいるかということ、輪廻転生の流れ（貧老病死の苦界）をつくりだしてきた、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心の中にあるのです。この世界は、肉体世界に生きている限り、この世界から抜け出すことはできませんし、拒否することはできません。なぜなら、光としての魂がこの肉体界にこの世界を体験することに、神意識を深めようとして降りてきているからです。一旦輪廻転生の流れの中に入ると、この世界に降りてきた自分の目的も忘れ、ただ不安恐怖の中で生きていくことになるのです。しかし肉体の中に存在する魂の叫びにより、安心立命、神を求めてきたのです。自分の中に神が内在することを知り、それを実感できた時、不動心を得たといえるのです。

このような心境になるには、分別する心をどのようにコントロールするかにかかっています。五井先生は、分別する心をもったままでいいから、統一（瞑想）により本心の中に入ってい

きなさい。本心の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくと言われているのです。その時自分の人生の中で判断した善悪は、自分がこの肉体界に神の姿、愛を現わすためのプロセスのもので、すべてが本心の中に消えてゆくものであることに私たちは気付くのです。

自分を赦すことの大切さ

分別心が本心の中に消えてゆく時に、最後の最後に現われる苦悩は、自分を責めてしまう業想念感情です。

五井先生の愛の教えにある核心は、「自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛す、」という文節です。

この肉体世界に住していると、真理を極めても、どうしても感情想念に把われてしまい、その自分を責めてしまう。それから解放してくれるのが、この教えなのです。

自分の過去の否定的なものの見方や愛情に欠けた行動などを自分自身が赦した時、安心立命を得、より偉大な自己とのかかわりを瞬時に手に入れることができるということです。自分を赦し、残っている否定的な感情的エネルギーを解放することで、

自分の浄化された意識の中から、他の人たちを快く赦すことができる。

また自分を愛することは、自分を赦すことにより、始まる。自分自身を赦した時、自分自身が尊いものであるということを受け入れることが出来る。自分達の価値に気づくことができないと、私たちの心の中に障壁をつくり、自分達が快く与える真の愛を行うことができなくなるといわれているのです。

人間性本来の智慧と直観とが全く一つになる

この肉体界を生きてゆくうえにおいて、どうしても肉体的な判断、世の中の動きの中で、何が正しく何が正しくないかなど判断をしてしまう。これをどのように処理をしていけばよいかについて五井先生はヒントを与えてくださっています。

『人類即神也』の宣言文で言われている、「いかなる批判、非難、評価も下さず」というこの文節は、私たちに真理をもとめてゆく上において、いろいろと考えさせてくれる文節です。

「ただ無批判に何でも善なりとみることではないし、ただ無防備に何でも受け入れるものではない。やはり宗教の道に深く広く分け入れれば入るほどハッキリとした批判力が出てくるものであってまるで心が馬鹿のように無批判になるものではない。内に確固とした正しい直観的批判力をもちながらも、そうした

批判力さえも消えてゆく姿と観じていかなる自他の言動に対しても振り回されず把われのない生き方をしてゆくこと。この考え方こそはじめて宗教的という空なる境地が開けてきて自ずと空即是色の真実の世界というものがその人自身の世界となってくるのである」と言われているのです。

人間性本来の智慧、つまり信仰する一人一人の人間の心の中において色々な体験をとおして疑問をもち、人間の理想の生き方を求めて得る智慧と、内なる神から得る直観が全く一つに全く一つになってこそこの世にも真実の世界が現れてくるのであると五井先生はいわれているのです。即ち先に言及した分別心と本心が統合された時、この肉体界に神界の姿が現れるということになります。

チャクラを常に開いて置く

チャクラを開くことと神意識を深めることとは密接な関係があります。

昌美先生によると、チャクラは、この宇宙神の無限なる生命エネルギーを受けとめ、生命輝かに生きるために不可欠な、魂と精神と肉体を統一・調和する機能を果たし、また我々の神性、靈性を開くために大変必要な器官なあります。

チャクラは自らの肉体と宇宙神とをつなぐ重要な働きをする

ものであり、チャクラを開くとは、宇宙神と直接交流し、自らの生命力を高めてゆき、自らの肉体を開発することとされています。

チャクラの働きは、自らの意識が神性、靈性に目覚め、高次元意識へと次元上昇するにつれて、次第に開いてゆき、それによって自らが自ずと直観し、体験してゆくものであるとされています。

もっと端的に言えば、神意識を深めるにつれ、チャクラは開かれ、チャクラが機能すれば、神意識は深まり、この両者の関係は、お互いに切っても切れない関係だといえます。不安恐怖に扱われると、チャクラは、閉じ、不安恐怖が全くなると、チャクラは開くといわれています。

このことは、常にチャクラを意識して、開いておくことが、自己中心の感情、即ち業想念感情の満ちている肉体世界を乗り越えてゆくうえにおいて、極めて有効な手段だと言えます。

チャクラが開いたときに現われるのは、予知能力ではなく、また予言する力でもない。自らの目を通して神を見、また自らの耳を通して神の声を聞くことができ、自らの肉体もすべて整っていることが判るようになるのである。さらに、神とつながるチャクラが開くと、神のバイブレーションがあることが判るようになり、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになり、また音も味も、妙なる美しいものが感じられる。そ

して、自分たちだけが素晴らしいのではなくて、すべての生きとし生けるものが全部つながっていることが実感できる。三次元世界にいながらにして、神界に生きられるようになるのである。

一瞬にしてすべてが神そのものとなってしまえば、神の心が自分の心として判り、神のなさしめることが自然に判るのである。聴こえてくるものは「絶対に大丈夫。すべてが光に包まれているし、人類の行方はすべて一つである」という神の言葉であり、そして自分もいつの間にか、自らの言葉を通して神の言葉を――人類が本当に行き着く美しい場所を、知らないうちに語っている。即ち神人たちは自分自身の姿を通して究極の真理を示すのである。「自分自身が完璧に神とつながって一光なのだ、すべては一つなのだ、すべては破壊されることなく、神様の中に包まれて生かされているのだ」ということを実感し、それぞれが神人としての輝かしい生き方を示すことによって、世の中が自然に変わってゆくのであるとされています。

『白光誌』2010年3月号「神人とチャクラ」

2012年7月大行事において私たち神人はあらゆる大災難を救う神力を授かり、2014年1月の新年祝賀祭において、「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」というご神示をいただいています。それを可能にしたのが、2010年私たち神人および神人予備軍全員のチャクラ（第六チャクラ）が開かれたことだと考えられます。

活性化しないで、放置しておく、せっかく開いていただいたチャクラが閉じるようになります。このことは、十分留意しておきたいものです。

暗黒的想念の波動を見極める直観力

チャクラを正しく開けば、ひらめきに添って能力が現われる。それは心に直接的にひびいてくる直観力で、特に必要な直観力は、否定的直観、暗黒的想念の波動を見極める直観力と言われています。これが養われてくると、神の叡智をキャッチできるようになると昌美先生は言われています。

そのためには、まず、自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せくので、祈り、自らの想念を浄める。そして日頃の自らの想念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていくことを勧められています。

否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らの本心が放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべては完璧にうまくいく。幸せで、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくれると解説さ

れています。(『次元上昇』)

神界に座を置く

以上神意識を深めるとはどういうことなのか、そのためにどういうことに留意しなければならぬかを整理してきましたが、神意識(愛の心)を深めるためには、この肉体界では、意識を神界に置くつまり分別心と本心とを統合(統一)するの項目で言及しました、本心の中に入れておくことが不可欠です。

これを可能にするのが、祈り、統一瞑想や印であり、これにより神意識は、飛躍的に深まっていくことでしょう。

本心にいつも入っておく即ち神界に座を置くことは、私たちそれぞれがやる以外なのです。即ち自分の分別心と本心を統合するには、守護霊守護神の支援を得るとしても自分の意思をはっきり示し、真理を身につけ、自己中心の感情、即ち業想念感情を直視し、常に統合していかない限り、守護霊守護神も十分な支援をすることはできないのです。

神界に座を置くことに成功した方々にその体験を聴くことは、大変有意義なことです。私は、五井先生に指導受けた高弟の諸先生のお話を拝聴する機会を多く得ることができ、大変勉強になりましたし、参考にもなりました。いまでも鮮明に記憶に残っています。また、地方で活躍する法友と交流することで多くのこ

とを学ぶことができたことは大変幸運であったと感謝しています。

最近各種印を多く組み、どのようなことが起こっても、大難を小難にしていたいただいとすべてに感謝して成功した方や、ひたすら五井先生の統一テープをもとに統一し、その心境を獲得された方のお話などは大変参考になりました。

それらの中で、自分も実践し、容易くでき、効果があると感じたものについて、紹介します。

それは、肉体にある七つのチャクラに意識（光の意識）を注ぎこみ、常に開いて、活性化しておくことです。私たちには、この肉体にある七つのチャクラのほか十二のチャクラを通して宇宙神とつながっており、私たちの頭上60センチ位のところに第八チャクラ降りて来ているのだそうです。

肉体にある七つのチャクラに光の意識を注ぐには、まず椅子に座り、あるいは正座して足が床から地球大霊王の中心までイメージで伸ばし、一番下のチャクラから一番上の七番目のチャクラまで一つひとつに深呼吸等をして光の意識を注ぎこんでいきます。そして第八チャクラに意識をおけば、宇宙神から降りて来ているチャクラにつながります。上位のチャクラに意識を置けばおほくほど光は強く感じます。そうすると、宇宙神から光がザッーと降りてきます。その光を肉体におさめれば、神界に座を置く状態になります。即ち肉体意識側から霊体意識側に移

れるというものです。

これを繰り返すと、光や高い波動を感じるようになります。自己中心の業想念感情は、おのずと宇宙神の光の中に還元され（消えてゆき）、神の愛の姿、ひびきを直観してきます。

神界に座を置くことができれば、自分の肉体を通して、宇宙神の光を放射できるでしょうし、自分の肉体の活性化もでき、神意識をさらに深めることが出来るのではないのでしょうか。新しい、神を深める体験をすることが出来るのです。そしてすべてを自ら自身と観する心を獲得するのではないのでしょうか。

この方法は、神と人間の関係をイメージしやすく、効果があると感じております。

私たちは、今まで幾転生、神界に座を置くことを求めてもなかなかうことかできなかったのに、何故今このように神界に容易く座を置くことができるようになったかというところ、この地球自体が次元上昇しており、五井先生作詞の歌『永遠の光』の「自然に開く花のこと 時きて目覚む神ごころ」の歌詞のように全人類が神聖復活の時を迎えているのです。この時を見越して、宇宙の神々や地球人類を守護する神々が、私たちを導いて下さっていたからなのです。

地球人類一人一人が、愛のひびきを響かせる、地上天国が現われる最終段階に、私たちは今いるのです。